

女の文体・男の文体 — 新聞投書を資料に —

佐 竹 久仁子

1. はじめに

現代の文学作品の文章には、女に特有の、あるいは男に特有の文体的特徴はないといわれる。つまり、そこにみられる文体的特徴は個性の差によるもので、性差には関係がないということである。たとえば、樺島・寿岳1965では現代小説100作品の文体を統計的に分析しているが、その結果から文体の性差を読みとることはできない。

しかし、一方で「女らしい文章」「男らしい文章」のイメージを多くの人がもっているのも事実であろう。波多野1954の実験にみられるように、小説の文章から書き手の性別をあてるとはむずかしいのであるが、たとえ実際にはまちがっているにせよ、文章の書き手を推測するさいの手がかりとなる「女の文体」「男の文体」のイメージのステレオタイプはあるはずである。また、寿岳1966では「女でなくてだれがこんな文章を書くものかと思える」文章があるとも述べられている。

伝統的な性役割や話しことばにみられる性差から推測される「女の文体」のイメージはおおよそつぎのようなものである。

- 表現が丁寧で待遇度が高い
- 表現がやわらかく優しい
- おしゃべりである
- 表現が感覚的、感化的である
- 話題は身のまわりの個人的なことである

そして、この対極にあるのが「男の文体」のイメージということになる。

このような「女の文体」「男の文体」のイメージは、現実の文章とは無関

係にあるのだろうか。プロの作家では文体の差は個性の差だといえるだろうが、プロではない一般の人々の文章ではどうだろうか。ここでは、新聞の投書の文章にこのようなイメージを支える性差がみられるのかどうかを探ってみた。

2. 資 料

1995年7・8月の2ヵ月間の以下の新聞投書のうち、投書者の年齢が18歳以上のものについて調査し、資料とした。^(注)対象は全体で1096（＜女＞ 442 ＜男＞ 654）である。

- ・朝日新聞「声」……………＜女＞ 172・＜男＞ 270
- ・毎日新聞「みんなの広場」……＜女＞ 137・＜男＞ 220
- ・読売新聞「気流」……………＜女＞ 133・＜男＞ 164

これら3紙の投書者の性別および年代別の内訳はつぎのとおりである。

() 内の単位は%

性別 年齢	女 性	男 性	計
18 ～ 34	120 (65.2)	64 (34.8)	184 (16.8)
35 ～ 64	264 (44.8)	325 (55.2)	589 (53.7)
65 ～	58 (18.0)	265 (82.0)	323 (29.5)
全 体	442 (40.3)	654 (59.7)	1096

(注) ただし、特定のテーマを設けた（たとえば「私の戦後五十年」「防災」など）投書の特集は除いた。また、性別や年齢が不明であるものも除いた。新聞はいずれも大阪本社発行のものである。

3. 調査項目

先にあげた「女（男）の文体」のイメージと関係がありそうな以下の項目について投書の文章を観察した。

(1) テーマ

これらの投書で述べられている内容は多様である。政治的な問題について論じるものもあれば、身のまわりのちょっとした出来事を綴るものもあり、いわゆる「硬い」話題から「軟らかい」話題までテーマは幅広い。ここでは、何をテーマとしているかによって、投書を大きく2類に分けた。今この2類を仮に「公的なテーマの投書」「私的なテーマの投書」とする。

① 公的なテーマの投書

新聞の記事をはじめ、マスコミで報道された社会的・政治的・経済的・国際的な問題や事件について論じ、見解・批判・抗議・要望・提案などを述べるもの。

② 私的なテーマの投書

身のまわりの出来事や体験、自然・風物や折にふれての思いを随想風に述べるもの。日常生活のマナー、ことばづかい、実用的なアイデア、健康法、人生観などについて述べるものもここに含める。

(2) 個人的事情にかんする叙述の有無

書き手の個人的な体験や、書き手あるいは書き手の家庭のおかれている状況についての具体的叙述があるかどうか。

【個人的事情にかんする叙述の例】

- 先日、江田島の海上自衛隊を見学した。教育参考館の中に入り、海軍関係の書や遺品などが展示されている前で話をしていると、高校生くらいの娘さんたちが「話を聞かせてください」と後についてきた。私たちも小学校五年のときに終戦を迎えた年代なので、～
- 米国滞在中に、大学付属博物館を手伝う機会を得た。東洋の収蔵品鑑定が主な仕事だったが、～
- 私は昭和二十一（一九四六）年、婦人に参政権が与えられて以来、ただ一回、市議会で支持政党の候補が出なかったとき棄権しただけで、すべて投票してきた。
- 私は今、病気で長期入院中の子どもに学習の機会を保障する病院内の教

育施設（院内学級）に勤めています。

- ・私自身、結婚し二児の母であるが、現役大学生である。
- ・私は先天性の重度の脳性まひの障害者です。～私は小さいころ、周りの大人から生まれてこなかったほうがよかったといわれました。
- ・今年の春、夫は六十五歳になった。二度目の定年を経てフリーの身である。
- ・二十七歳になる長男が仕事を辞めて大阪から帰ってきた。専門学校を出て就職していたのだが、大学へ入りたいという。
- ・私の父は脳こうそくで入院中です。呼吸不全のため一生を病院で過ごすようです。
- ・私の義弟は道路標識の取り付けや、横断歩道の白線を引く仕事をしている。

(3) 待遇表現

(3)－1 「デスマス体」か「ダ・デアル体」か

(3)－2 「デスマス」以外の、尊敬・謙譲・丁寧表現の使用の有無 デスマス以外の待遇表現が使われているかどうか。

【デスマス以外の待遇表現の例】

どなたかが寄贈された／おっしゃるとおり／ご家族の方々／皆様のお話
／お願いいたします／毎日でございます／お恥ずかしい

(4) 主張の強さ

(4)－1 「～と思う」「～と思われる」を用いた文の有無

文末に用いられる「～と思う」「～と思われる」は断定をやわらげる表現効果をもつ。この形式を用いた文が使われているかどうか。

【「～と思う」「～と思われる」を用いた文の例】

金融機関には情報開示の姿勢が欠けていると思う。／ぜひ投票に行くべきだと思う。／明らかに行き過ぎだとと思われる。／早急に対策を立ててほしいと思います。

(4)－2 当為判断の表現の有無とその表現形式

当為判断を表現する文があらわれるかどうか。また、当為判断の表現が使われているものについて、強い断定を意味する裸の形式「a. ～すべきだ・～しなければならない・～する必要がある」を使うか、aのあとに「b. ～だろう・～と思う・～（の）ではないか・～（の）ではないだろうか」などを付け加えた、やわらげの形式を使うか。

【aの例】

対策を早く立てるべきである。／常に念頭に置かねばならない。／政治への信頼を取り戻す必要があります。

【bの例】

妥当な額を決定すべきだろう。／環境づくりに取り組むべきではなからうか。／機会を増やさなければならないと思います。／もっと価格の低いものに抑える必要があるのではないだろうか。

(5) 感情表現の有無

書き手自身の現在または過去の感情を表出する表現があらわれるかどうか。つぎのようなことが文末に用いられるものを感情表現とした。

- 〔喜 び〕：喜んでいる・喜びでいっぱいだ・うれしい・うれしく思う
・有頂天になる・楽しみだ・心がなごむ など
- 〔悲しみ〕：悲しい・悲しを感じる・悲しく思う・涙があふれる・涙がこぼれる・心が沈む・胸が痛む・さびしい・つらい など
- 〔怒 り〕：怒りを覚える・怒りに震える・憤りを感じる・腹が立つ・腹立たしい・憤懣やるかたない など
- 〔感 動〕：感動する・胸が熱くなる・心を打たれる・目頭が熱くなる など
- 〔残 念〕：残念だ・痛恨の極みだ・悔しい など
- 〔好 悪〕：好きだ・嫌いだ・いやだ・憎い など
- 〔恐 れ〕：心配だ・不安だ・恐ろしい・怖い など

(6) 口語的表現の有無

助詞・助動詞の口語形や融合形、助詞の省略、その他口語的語彙があらわ

れるかどうか。

【口語的表現の例】

～なんて・～なんか・～って・～だけど・～だし・～しなくちゃ・～するんじゃないか・～してます・～したんだ・～しちゃった・カッコいい・ちょっぴり・ほんとに・いやーな・だって・じゃあ など

(7) 会話文の有無

「 」でくくられた会話文があらわれるかどうか。実体験にもとづいた会話の引用をみる。公的な人物の発言の引用は含めない。

4. 調査結果

(1) テーマ

〔表1〕 () 内の単位は%

性別 テーマ	女	男	全 体
公的テーマ	198 (44.8)	467 (71.4)	665 (60.7)
私的テーマ	244 (55.2)	187 (28.6)	431 (39.3)

・女は男よりも私的テーマが多く公的テーマが少ない ($\chi^2=78.27$)

(2) 個人的事情にかんする叙述の有無

〔表2〕 () 内の単位は%

性別 テーマ	女		男		全 体	
	あ り	な し	あ り	な し	あ り	な し
公的テーマ	99 (50.0)	99 (50.0)	89 (19.1)	378 (80.9)	188 (28.3)	477 (71.7)
私的テーマ	210 (86.1)	34 (13.9)	126 (67.4)	61 (32.6)	336 (78.0)	95 (22.0)
全 体	309 (69.9)	133 (30.1)	215 (32.9)	439 (67.1)	524 (47.8)	572 (52.2)

- 女のほうが個人的事情の叙述があるものが多い ($\chi^2=144.98$)
- 公的テーマより私的テーマに個人的事情の叙述があるものが多い
($\chi^2=258.75$)
- いずれのテーマでも女に個人的事情の叙述があるものが多い

$$\left(\begin{array}{ll} \text{公的テーマのばあい} & \chi^2 = 65.65 \\ \text{私的テーマのばあい} & \chi^2 = 21.51 \end{array} \right)$$

(3) 待遇表現

(3)-1 デスマス体かダ・デアル体か

[表 3] () 内の単位は%

性別 テーマ	女			男			全 体		
	デスマス	ダ・デアル	混 用	デスマス	ダ・デアル	混 用	デスマス	ダ・デアル	混 用
公的テーマ	55 (27.8)	137 (69.2)	6 (3.0)	42 (9.0)	417 (89.3)	8 (1.7)	97 (14.6)	554 (83.3)	14 (2.1)
私的テーマ	72 (29.5)	161 (66.0)	11 (4.5)	33 (17.6)	147 (78.6)	7 (3.7)	105 (24.4)	308 (71.5)	18 (4.2)
全 体	127 (28.7)	298 (67.4)	17 (3.8)	75 (11.5)	564 (86.2)	15 (2.3)	202 (18.4)	862 (78.6)	32 (2.9)

- 女のほうがデスマス体の使用率が高い ($\chi^2=56.71$)
- 男では私的テーマのほうがデスマス体が多い ($\chi^2=12.89$)
- 女ではテーマによる差はない ($\chi^2=0.90$)

[表 4] 個人的事情の叙述の有無とデスマス体 () 内の単位は%

性 別 個人的事情	女		男		全 体	
	デスマス	ダ・デアル	デスマス	ダ・デアル	デスマス	ダ・デアル
あ り	89 (28.8)	209 (67.6)	35 (16.3)	171 (79.5)	124 (23.7)	380 (72.5)
な し	38 (28.6)	89 (66.9)	40 (9.1)	393 (89.5)	78 (13.6)	482 (84.3)

- 男では個人的事情の叙述のあるほうがデスマス体が多い ($\chi^2=8.10$)
- 女では個人的事情の叙述の有無による差はない ($\chi^2=1.31$)

(3) - 2 「デスマス」以外の、尊敬・謙譲・丁寧表現の使用の有無

〔表 5〕

() 内の単位は%

性 別 テーマ	女		男		全 体	
	あ り	な し	あ り	な し	あ り	な し
公 的 テー マ	64 (32.3)	134 (67.7)	76 (16.3)	391 (83.7)	140 (21.1)	525 (78.9)
私 的 テー マ	97 (39.8)	147 (60.2)	38 (20.3)	149 (79.7)	135 (31.3)	296 (68.7)
全 体	161 (36.4)	281 (63.6)	114 (17.4)	540 (82.6)	275 (25.1)	821 (74.9)

- 女のほうが待遇表現を用いるものが多い ($\chi^2=50.63$)
- 女では私的テーマに待遇表現を用いるものが多い ($\chi^2=41.51$)
- 男ではテーマによる差はない ($\chi^2=0.07$)

〔表 6〕 個人的事情の叙述の有無と待遇表現の有無 () 内の単位は%

性 別 個人的事情	女		男		全 体	
	あ り	な し	あ り	な し	あ り	な し
あ り	128 (41.4)	181 (58.6)	57 (26.5)	158 (73.5)	185 (35.3)	339 (64.7)
な し	33 (24.8)	100 (75.2)	57 (13.0)	382 (87.0)	90 (15.7)	482 (84.3)

- 個人的事情の叙述のあるほうが待遇表現を用いるものが多い
($\chi^2=55.73$)
- どちらのばあいも女のほうが待遇表現を用いるものが多い

{ 個人的事情の叙述のあるもののばあい $\chi^2=12.34$ }
 { 個人的事情の叙述のないもののばあい $\chi^2=10.77$ }

(4) 主張の強さ

(4)－1 「～と思う」「～と思われる」を用いた文の有無

〔表 7〕 () 内の単位は%

性 別 有 無	女	男	全 体
あ り	153 (34.6)	184 (28.1)	337 (30.7)
な し	289 (65.4)	470 (71.9)	759 (69.3)

- 女のほうが「～と思う・～と思われる」を用いるものが多い

$$(\chi^2 = 5.20)$$

(4)－2 当為判断の表現の有無とその表現形式

〔表 8〕 当為判断の表現の有無 () 内の単位は%

性 別 当為判断	女	男	全 体
あ り	51 (11.5)	169 (25.8)	220 (20.1)
な し	391 (88.5)	485 (74.2)	876 (79.9)

- 女のほうが当為判断の表現を用いるものが少ない ($\chi^2 = 33.63$)

〔表 9〕 当為判断表現のあらわれるものについて

() 内の単位は%

	a のみ	b のみ	a + b	計
女	25 (49.0)	22 (43.1)	4 (7.8)	51
男	111 (65.7)	39 (23.1)	19 (11.2)	169
全 体	136 (61.8)	61 (27.7)	23 (10.5)	220

- 「a 裸の形式」を用いるのは女より男に、「b やわらげの形式」を用いるのは男より女に多い ($\chi^2=7.88$)

(5) 感情表現の有無

〔表10〕

() 内の単位は%

テーマ \ 性別	女		男		全 体	
	あ り	な し	あ り	な し	あ り	な し
公的テーマ	56 (28.3)	142 (71.7)	59 (12.6)	408 (87.4)	115 (17.3)	550 (82.7)
私的テーマ	75 (30.7)	169 (69.3)	35 (18.7)	152 (81.3)	110 (25.5)	321 (74.5)
全 体	131 (29.6)	311 (70.4)	94 (14.4)	560 (85.6)	225 (20.5)	871 (79.5)

- 女のほうが感情表現を用いるものが多い ($\chi^2=37.67$)

(6) 口語的表現の有無

〔表11〕

() 内の単位は%

テーマ \ 性別	女		男		全 体	
	あ り	な し	あ り	な し	あ り	な し
公的テーマ	17 (8.6)	181 (91.4)	7 (1.5)	460 (98.5)	24 (3.6)	641 (96.4)
私的テーマ	72 (29.5)	172 (70.5)	14 (7.5)	173 (92.5)	86 (20.0)	345 (80.0)
全 体	89 (20.1)	353 (79.9)	21 (3.2)	633 (96.8)	110 (10.0)	986 (90.0)

- 女のほうが口語的表現を用いるものが多い ($\chi^2=83.670$)

(7) 会話文の有無

〔表12〕

() 内の単位は%

性別 テーマ	女		男		全 体	
	あ り	な し	あ り	な し	あ り	な し
公的テーマ	20 (10.1)	178 (89.9)	4 (0.9)	463 (99.1)	24 (3.6)	641 (96.4)
私的テーマ	84 (34.4)	160 (65.6)	30 (16.0)	157 (84.0)	114 (26.5)	317 (73.5)
全 体	104 (23.5)	338 (76.5)	34 (5.2)	620 (94.8)	138 (12.6)	958 (87.4)

・女のほうが会話文を用いるものが多い ($\chi^2=80.52$)

(注) χ^2 値 (危険率5%) は自由度1で3.84、自由度2で5.99であり、これらの値を越えると有意差が認められる。

5. 分 析

ここでとりあげたいずれの項目についても傾向的な性差が認められる。

5-1 文章の内容

まず、内容の側面をみてみよう。第一にテーマの選び方が女と男とでかなりちがっていることが注目される。女のほうが男よりも日常生活を題材にした私的なテーマの投書が多い。しかも、女では私的なテーマの割合が公的なテーマを上回るのにたいし、男では公的なテーマが私的なテーマよりずっと多い〔→表1〕。

第二に、個人的事情にかんする言及の有無にちがいがあ。投書者自身の体験を述べたり個人的な事情に触れたりする文章は圧倒的に女に多い。さらに、この個人的事情の中身をみると、女のほうにはよく家族が登場する。個人的事情の叙述に「夫・妻・子・孫・母・父」など家族をあらわす語が使われる割合は以下のとおりである。

女……個人的事情の叙述のある 309のうち 161 (52.1%)

男……個人的事情の叙述のある 215のうち 52 (24.2%)

女でも男でも公的なテーマより私的なテーマに個人的事情の叙述が多くあらわれる。そしてそのいずれのテーマにおいても女は男より個人的な事情に言及することが多い〔→表2〕。女の文章は私的なテーマが多いうえにその大半が家庭を中心とした個人的な事情の叙述を含むということが、冒頭に示した女の文体のイメージのひとつ、「話題は身のまわりの個人的なことである」につながるのであろう。

このことはまた、女の文体が「おしゃべりである」というイメージとも関係する。話題が重要ではないと判断されるとき、それは「おしゃべり」となる。天下国家をめぐる問題は語る価値があるが、日常生活の世界は語るに値しない雑事だとみる立場からは、家庭を中心とした日常生活を話題にすることは「おしゃべり」とみなされる。この立場とはいってもなく男の立場である。家庭や地域の日常生活に関心の薄い男は依然として多い。関心のないことには重要性を見出せないものである。男の関心にかたよりがあるのにたいし、今や女の関心は自分や家族の日常にもそれをとりまく社会にも広く及んでいる。したがって、女はいずれについても語る価値を認めるのだが、男の視点ではその半分は「おしゃべり」としてしかとらえることができないでいる。

もうひとつ、「おしゃべり」には必要以上にことば数が多いという意味もある。女は公的なテーマであっても、半数が個人的事情に触れている。男ではこれは2割にすぎない〔→表2〕。公的なテーマのばあい、文章の意図は抗議や要求、見解の表明などなのであるが、必要なことだけを述べるとすれば個人的事情まで述べることはない。つまり、個人的事情に触れた部分はいわば余分というわけで、これを「おしゃべり」ととらえることもできる。しかし、この余分は文章に具体性を与え説得力をもたせる。男の文章が多く抽象的で無味乾燥なのに比べ、女の文章が具体的に読み手の興味をひくのはこの「おしゃべり」のおかげである。

女の文体が「おしゃべりである」というのは、前者の意味では的外れであるが、後者の意味ではあたっているといえる。

ところで、これらの内容の差が生じるのはなにによるのだろうか。考えられることのひとつは、男のほうが旧弊な性役割意識に強くとらわれている、ということである。政治や社会は男の領域、家庭や日常生活は女の領域^(注)という思いこみの強さが、男に公的テーマを選ばせるのではないだろうか。また、男が個人的事情について触れたがらないということから、「個人的体験を打ち明けることは弱みにつながり、権力者は弱みを見せない」という趣旨のスペンダー1987の指摘が思い浮かぶ。男は個人的事情を公にすると自分の権威が損なわれるような気がするようだ。

(注) ただし、ここでは新聞社が掲載する投書を選ぶときの基準については考えにいられていない。

5-2 表現

まず、待遇表現についてであるが、女のほうが男よりもデスマス体の使用率が高く〔→表3〕、また、デスマス以外の待遇表現を用いる文章も多い〔→表5〕。つまり、女は男よりも丁寧で待遇度の高い文章を書く傾向がある。調査結果からさらに内容との関係もみてみよう。

女のばあい、デスマス体かダ・デアル体かは、テーマのちがいや個人的事情の叙述の有無とは関係がない。一方、男では私的テーマの文章、個人的事情の叙述のある文章のほうがデスマス体の割合が高い〔→表3・4〕。これはなぜだろう。投書の文章をみると、新聞の社説に近いものが一方の極にあり、もう一方の極に個人的な手紙に近いものがある。私的なテーマをとりあげたり個人的な事情を述べたりするほうがより手紙に近くなりやすく、したがって単純に考えれば、読み手への丁寧さを意識したデスマス体が用いられることが多くなるはずである。男のばあいにはこれがあてはまる。そして、男は公的テーマをとりあげるとき社説に近い述べ方をすることが多い。社説では事実や主張の内容を伝えればいいわけで、その述べ方に丁寧さといった読み手への配慮は必要ではない。そこで、ダ・デアル体がふつうに使われるわけだが、これは客観性・冷静さをあらわすとともに調子の強さもともなう。

女は、この調子の強さをやわらげるために公的テーマのばあいでも私的テーマと同じようにデスマス体を使用するのだろう。

デスマス以外の待遇表現は、女でも男でも個人的事情の叙述のあるもののほうに多く使われる〔→表6〕。これは、個人的事情を述べるさいはかわりのある人物に言及することが多く、その人物にたいする敬語があらわれやすいためである。したがって、個人的事情の叙述のある文章が多い女の投書に男より待遇表現が多くなるのは当然である。だが、女のほうに待遇表現が多いのは、単に個人的事情の叙述の多さだけからではない。同じ個人的事情の叙述のある文章どうしをくらべても、女は男よりも待遇表現の使用率が高いのである〔→表6〕。

なお、テーマとの関係を見ると、女では私的テーマのほうに待遇表現が多くあらわれるが、男ではテーマによる差は認められない〔→表5〕。男のばあい、公的テーマの文章に用いられている待遇表現をみると、言及する人物にたいする敬語よりも「～をお願いする・～していただきたい」といった依頼表現が多い。つまり、男ではこのような依頼表現を中心とした待遇表現が公的テーマに、登場人物にたいする敬語を中心とした待遇表現が私的テーマにあらわれて、結果として待遇表現の使用率にテーマによる差がない。女の場合にもこの種の依頼表現が使われるのだが、それ以上に個人的事情の叙述の多さの影響が大きい。

つぎに、主張の強さにみられる性差からは、「表現がやわらかく優しい」という女の文体についてのイメージが現実にも根拠をもつものであることがわかる。ことの善悪・理非・要不要などについての意見の主張をおこなうとき、判断を言いきって断定することを避け、断定のやわらげ形式「～と思う・思われる」を用いることがある。この形式を用いるのは男よりも女に多い〔→表7〕。断定をやわらげる働きをする形式には「～と思う・思われる」のほかにも「～だろう・～ではないだろうか」などもある。これらの使用状況を当為判断の表現についてみると、「a 裸の形式」の使用率は女よりも男が高く、「b やわらげの形式」の使用率は男よりも女が高い〔→表9〕。

なお、当為判断の表現自体が女の文章には男ほどあらわれない〔→表8〕。女は「～すべきだ」系の当為判断の表現を避けて、「～してはどうか」「～してほしい」といった提案や要望の形でおだやかに意見を表明する傾向があるようだ。

このように、言いきって強く断定することへのためらいは女の文章にみられる傾向だが、これは読み手に配慮しておしつけがましさを避けたものともとれるし、自信のなさともとれる。その両方の側面があるのだろうが、これが表現のやわらかさとなっている。

第三に、感情表現・口語的表現・会話文であるが、いずれも男より女の文章に多くあらわれる。これらの表現は公的テーマより私的テーマに多く用いられると予想されるが、そのとおりである。では、男より女にこれらの表現が多いのは、単に女の投書に私的テーマのものが多という理由からだけかという、そうではない。公的・私的どちらのテーマでもこれらの表現の使用率は女のほうが高いのである〔→表10・11・12〕。

女のほうが喜怒哀楽の感情をそのままことばで率直に表現するという傾向は、個人的事情をためらわずに述べるという傾向と根は同じである。女は男にくらべ、感情であれ体験であれ、自己を表出することへのためらいや恐れが少ない。また、日常語のやわらかさをもつ口語的表現には形式ばったところがなく、感情がすなおにあらわれる。そして、肉声で語っているという感化的な効果がある。だが、重々しさや権威とはほど遠いもので、大所高所から天下国家を論じるタイプ — 男に多い — には好まれないだろう。感化的な効果は会話文の使用によっても生じる。個人的事情を述べるのに会話文が用いられると、叙述が具体的になり読み手の興味がひきつけられるのである。これら感情表現・口語的表現・会話文の使用にみられる性差は、女の文体が「表現が感覚的・感化的である」というイメージを裏付ける。

6. おわりに

投書の文章では内容や表現の特徴にいくつかの傾向的な性差がみられる。そして、これが「女（男）の文体」のイメージのステレオタイプと結びついていることをここで明らかにした。話しことばにおいては、女は男よりも、より丁寧な表現・待遇度の高い表現を用いたり、強い主張を避け、間接的な表現を用いて押しつけがましさをやわらげたりする傾向があることがこれまでにもたびたび指摘されている。この傾向は、投書の文章の文体にもそのままあてはまるといえる。

このような文体の性差はどんな種類の文章でも観察できるわけではない。個人的な性質の文章では性差があらわれやすいが、一方に「性差がない」とされる種類の文章 — たとえば、論文や事務文書、新聞記事などの文章 — もある。だが、これらが性と無関係のいわゆる「中性的な」文章なのかとい^(注)うと、けっしてそうではない。「女の文体」「男の文体」の性質をみれば、「中性的な」文章がじつは「男の文体」の文章であることが明らかになるだろう。

なお、ここでとりあげた項目以外にも、語種をはじめ、言いさし表現・言いわけ表現・文語的表現の使用など傾向的な性差がみられる事項がある。また、年齢差についてここではふれなかった。これらについては稿を改めて述べることにする。

(注) たとえば、れいのるず編1993の座談に「論文のことばっていうのは中性ではなくて、あれはやっぱり男性のことばだから～」というしま・ようこの発言がある。

【参考文献】

- 井出 祥子 (1982) 「待遇表現と男女差の比較」(『日英語比較講座 5 文化と社会』 大修館書店)
- 樺島 忠夫・寿岳 章子 (1965) 『文体の科学』 (綜芸社)

寿岳 章子 (1966) 『レトリック — 日本人の表現 — 』 (共文社)

寿岳 章子 (1979) 『日本語と女』 (岩波新書)

D・スペンダー (1987) 『ことばは男が支配する』 (れいのるず=秋葉かつ
え訳 勁草書房)

波多野完治 (1954) 「男の文章 女の文章」 (宮城音弥編『言葉の心理』
河出書房)

れいのるず=秋葉かつえ編 (1993) 『おんなと日本語』 (有信堂)

『日本語学』 12-6 (特集 世界の女性語 日本の女性語) 1993 (明治書院)